

体育理論における「スポーツの国際親善や世界平和における役割」の理解に向けて：オリンピックを対象とした教材内容に関する一解説

黒須 朱莉¹⁾

Toward an Understanding of “The Role of Sport for International Friendship and Peace” as a Theory of Physical Education: An Exposition of Olympism and the Olympic Truce.

Akari KUROSU

Abstract

The purpose of this report was to expound the meaning of International Friendship and Peace in Olympism by Pierre de Coubertin and the link with the Olympic Truce. Olympism by Coubertin aimed at Universal Peace. He thought that wars were produced by ignorance for others and other nations. It was therefore necessary to resolve this ignorance with the action — that the youth of the world meet each other and be exposed to other cultures in the Olympics every four years. In the Olympics, they can understand the existence of various nations and learn about the spirit of mutual understanding and respect through sport, with these behaviors leading to become the foundation of coexistence and prosperity. It can be said that this interpretation was the meaning of International Friendship in Coubertin's Olympism. He presented the concepts of the Olympic Truce as the attitude of the spectators in which the Olympics would be held with a common purpose. He also stated that the spectator's “exclusively nationalistic feelings”, “hostilities, disputes, misunderstandings” and “wars” should cease. It can be said that this way of thinking indicated the Olympic movement as a Peace Movement, which it intended the Olympic idea to spread over whole societies surrounding Olympics, as well as on the athletic field. For this reason, the concept of Olympic Truce can be another element of Olympism.

Key words : Physical Education Theory, Peace, International Friendship, Olympism, Olympic Truce

キーワード：体育理論，世界平和，国際親善，オリンピズム，オリンピック休戦

1) スポーツ学部

はじめに

平成20(2008)年以降の学習指導要領の改訂により、中学校と高等学校(以下、中高と略す)の保健体育では体育理論における指導内容と対象とする学年や時間数の目安が示された。そして中高ともに、文化としてのスポーツの意義や特徴を理解するためにオリンピックが学習内容に取り上げられることになった。具体的に、中学校では「オリンピックや国際的なスポーツ大会などは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていること」(文部科学省, 2008)を学ぶ旨が示され、高等学校においても「現代のスポーツは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしており、その代表的なものにオリンピックムーブメントがあること」(文部科学省, 2009)を学習することが明記されている。オリンピックにはスポーツのもつ教育的な意義やアンチ・ドーピングをはじめとする倫理的な価値など、スポーツの文化的な意義を理解する上で多くの要素を包含しているが、なかでも中高の体育理論における学習内容には一貫して国際親善や世界平和といった側面に対するスポーツの役割が挙げられており、その代表的なものとして明確にオリンピックの存在が示されている。

学習指導要領改訂以前の中高の体育教師による体育理論分野における実践の蓄積は乏しく、特にスポーツの歴史的・文化的内容を扱った実践報告はごく一部であった。(吉田, 2016)しかし改訂後、体育理論におけるオリンピックを対象とした教材研究の蓄積は進みつつある^{注1)}一方で、オリンピックの重要な側面である国際親善や世界平和への役割を学ぶための教材研究は管見の限り見当たらない。

『体育科教育』第60巻7号では「ロンドンオリンピックを体育授業に取り入れるために」と題する特集が組まれた。真田(2012)は「オリンピックを体育理論の教材にするヒント」のなかで「オリムピズムとは、簡単にいう

と、近代オリンピックの創始者クーベルタンが唱えた理念で、スポーツを通して、体と心をきたえる、世界のいろいろな国の人と交流する、そして平和な社会を築いていこうという考えのこと。オリムピズムの考えを広めるための活動すべてが、オリンピック・ムーブメントであり、オリンピック競技大会の開催もオリンピック・ムーブメントの一つである。勝ち負けを競うとともに、オリムピズムの理念を広げる運動がオリンピックである。これを理解することがオリンピックを学習する最大の意義であろう」と述べている。オリンピック競技大会は、ピエール・ド・クーベルタン(以下、クーベルタンと略す)が唱えたオリムピズムを基盤^{注2)}として展開されるオリンピック・ムーブメントの一活動として位置づけられる。そして特筆すべきは、オリンピックは世界平和への寄与という目的を明確に打ち出した平和運動としての側面を有している点にある。誤解を恐れずにいえば、オリンピックの理念であるオリムピズムを学ぶことは、スポーツの国際親善や世界平和における役割について理解することに他ならない。この意味において、オリンピックを体育理論の教材として取り上げるにあたり、まずは体育教師自身が、オリンピックと世界平和の関係やオリンピックにおける国際親善の意味を理解しておくことが不可欠であろう。

本報告は、体育教師の教材理解に向けて、オリンピックと国際親善及び国際平和との関係に照準を定めて解説を試みる。そのために、先行研究の内容を踏まえながら1)クーベルタンが理想として掲げたオリンピックの理念(オリムピズム)^{注3)}のなかで国際親善や世界平和はどのように示されているのか。さらに、2)オリムピズムとオリンピック休戦の関係はどのように説明できるのか、以上の2点をみていきたい。

本報告でオリンピック休戦を取り上げた理由は3点ある。内容を先取りすると、まずオリンピック休戦はクーベルタンのオリムピズ

ムの一要素として位置づく「観念」であり、世界平和への寄与を目的とするオリンピックとは理念上不可分一体のものと考えられるためである。2点目は、3点目と関連して、現在オリンピック休戦は国際オリンピック委員会（以下、IOCと略す）によって、オリンピック・ムーブメントの一つとして展開されている活動^{注4)}であり、実際の取り組みとしての

側面をもつためである。3点目は、学習指導要領に則って編集された保健体育の教科書に、オリンピックと世界平和の関係性を示す具体例としてオリンピック休戦が取り上げられており（表1）、今後、実際に体育教師が教科書教材を用いた教材研究を行うにあたり、取り上げやすい題材であると考えたためである。^{注5)}

表1：保健体育の教科書におけるオリンピック休戦に関する記述

中学校：保健体育教科書	
書名・出版社 発行年・使用学年	オリンピック休戦に関する記述
書名：新編 新しい保健体育 出版社：東京書籍 発行年：平成18年 使用学年：1－3年	資料編 体育編 コラム 発展 オリンピックの起源／古代オリンピック 古代オリンピックの開催中は、たとえ戦争状態であっても休戦し、競技者はたがいにフェアプレーの精神で競技を行ったといわれています。だからこそ、古代オリンピックは平和とフェアプレーの精神で開催された競技の祭典であったと現代にも伝えられているのです。 p. 138.
書名：保健体育 出版社：大修館書店 発行年：平成28年 使用学年：1－3年	第3章 文化としてのスポーツ 2 国際的スポーツ大会の役割 1 国際的スポーツ大会の果たす役割は大きい ②世界平和への貢献 オリンピックは、世界平和の実現を願って、クーベルタンにより始められた大会です。大会期間中には戦争や武力行為の停止（オリンピック休戦）が呼びかけられるなど、その考えは多くの人に受け入れられて、いまにいたっています。（図1） p. 34. 図1 オリンピック休戦を願う壁 古代オリンピックでは「エケケイリア」という休戦期間がありました。現在のオリンピックでは、選手村にこの壁を設けてオリンピック休戦を呼びかけています。 p. 34.
書名：新・中学保健体育 出版社：学研教育みらい 発行年：平成29年 使用学年：1－3年	3章 文化としてのスポーツ 2 国際的なスポーツ大会とその役割 コラム オリンピック休戦 世界各地では、さまざまな争いが今も絶えません。そこで、古代オリンピックにならい、オリンピック開催期間は休戦が呼びかけられています。1994年冬季・リレハンメル大会からは、国連もこの呼びかけに賛成して後押ししています。 p. 163. 探求しようよ！ 古代オリンピックってどんな大会だったの？ 紀元前8世紀に、ある国の王が神のお告げを受けて、争っていた国との戦いをやめ、オリンピックで競走を行ったことが始まりといわれています。その後は、レスリング、ボクシング、やり投げ、円盤投げなどの競技も行われるようになりました。大会期間を含めた3か月は、いかなる争いごとも禁じられていました。現在のオリンピックが平和の祭典といわれるのは、この考えを引き継いでいるからです。 p. 166.
高等学校：保健体育教科書	
書名：現代高等保健体育改訂版 出版社：大修館書店 発行年：平成29年 使用学年：1－3年	1単元 運動・スポーツの文化的特徴 4 オリンピックと国際理解 1 オリンピズムとオリンピック・ムーブメント オリンピックの創始者クーベルタンは、スポーツによる青少年の健全育成と世界平和の実現を理念として掲げました。この理念をオリンピズムと呼びます。そして、オリンピズムを実現するために国際オリンピック委員会（IOC）が中心となっておこなう活動がオリンピック・ムーブメントです。そこには、オリンピックの開催やスポーツの普及活動、アンチ・ドーピング運動のほか、世界に向けた休戦の呼びかけ、環境の保全運動などが含まれます。 p. 126.

注) 文部科学省の中学校用教科書目録（平成30年度使用）及び高等学校用教科書目録（平成30年度使用）に挙げられている検定済教科書のうち、オリンピック休戦に関する記述がある教科書のみ取り上げた。

1. 古代オリンピックにおけるエケケイリア

本報告で取り上げるオリンピック休戦とは、古代オリンピックで機能していた休戦協定、エケケイリアから着想を得た試みのことである。まずは近代オリンピックのモデルとなった古代オリンピックとエケケイリアについて確認しておきたい。

古代オリンピックとは、紀元前776年から紀元後393年までの約1200年の間、4年に一度古代ギリシャのオリンピアで行われていた祭典のことをさす。古代ギリシャでは、この4年間を一つの時間の単位としてオリンピアースと呼んでおり、「これが今日のオリンピック競技大会（英語の正式名ではオリンピアード、Olympiad）の表記につながっている」といわれている。（田原，2008）

古代オリンピックはオリンピアの主神ゼウスに捧げられた宗教祭典の行事として位置づけられており、オリンピック競技は神に奉納される祭典競技であった。古代ギリシャ人は古代オリンピックを開催する際、スポンドフォロイ（休戦運び人）と呼ばれるオリブの冠をかぶり、杖を持った使者を主催国のエリスからギリシャの全ての国へ派遣した。使者の役目は、祭典の正確な日取りを知らせること、訪れた国の人たちを祭典へ招待すること、そして休戦を宣言することであった。なぜなら、国家間の争いが絶えなかった古代ギリシャでは、オリンピアへやって来て帰っていく競技者や観客に旅の安全を保証することが必要不可欠であったからである。エケケイリアの期間は当初一ヶ月であったが、参加者が増大し、遠く離れた国からやってくる競技者や観客が増えると二ヶ月に延長され、最終的には三ヶ月以上となった。これらの期間は、参加者が祖国を出発してから、競技を終えて祖国に戻るのに必要とされた期間であった。このエケケイリアの期間は、祭典に参加する国は武器を取ってはならず、訴訟を起こ

してはならず、死刑を執行してもいけなかった。そして違反者は重い罰金を課せられたといわれている。（スワドリング，1994；師尾，2004）

2. クーベルタンのオリimpiズムにおける国際親善と世界平和

1896年の第1回アテネ大会から歩みを進めたオリンピック競技大会は、2020年に第32回目の大会（Games of the XXXII Olympiad）^{注6）}を東京で迎える。この近代オリンピックの生みの親であるクーベルタンが理想として掲げたオリimpiズムに国際親善や世界平和はどのように示されているのだろうか。クーベルタンは、オリンピックの理念を述べるなかで次のように述べている。

他人・他国への無知は人々に憎しみを抱かせ、誤解を積み重ねさせます。さらには、さまざまな出来事を、戦争という野蛮な進路に情け容赦なく向かわせてしまいます。しかし、このような無知は、オリンピックで若者たちが出会うことによって徐々に消えていくでしょう。彼（彼女）たちは、互いに関わり合いながら生きているということを認識するようになるのです。（クーベルタン，1894；和田，2014，p. 180）

四年ごとの競技会に集まるとき、世界中の競技者たちは過去の記憶によって気高さがさらに高まり、それゆえ、互いにいっそう理解し合うことを、双方が譲り合うことを、そして競技において、勝利の栄誉以外には何の見返りも求めないことを学ぶだろう。…心にこれらの考えがあって、わたしはオリンピック競技会を蘇らせようとしたのだった。多くの努力を重ねて、わたしは成功した。オリンピックの制度が繁栄するならば一すべての文明国家が協力すれば必ずそうなる、わたしは確信しているのだが、オリンピックはおそらく全世界の平

和を確保する、間接的にはあるが有力な一要因となるだろう。戦争が起こるのは、国々が互いに相手を誤解するからである。今さまざまな民族同士を切り離している諸々の偏見を乗り越えてしまうまで、わたしたちは平和を手にはできないだろう。この目的に到達するため、あらゆる国の若者が周期的に集まって、筋肉の強さと鋭敏さを友好的に試してみることにすぐれた方法は、他にないのである。オリンピック競技会は、古代の人々とともに運動競技を制御し、平和を促進させた。これから先、オリンピック競技会に同じような施しを期待することは幻想ではない。(クーベルタン, 1896: 和田, 2007, pp. 107-108.)

まず、オリンピックの制度が繁栄した先にクーベルタンが見据えていたのは、戦争の対極にある平和な世界であった^{注7)}。そしてクーベルタンは、戦争とは他者や他国に対する無知から生まれる「憎しみ」「誤解」、そして「偏見」によって引き起こされるものであると考えていた。この無知とは、「自分が知っている枠組みの外に、どのような世界があるのかを知ろうとしない精神状態」(和田, 2015) のことである。クーベルタンは、無知を克服するためには「オリンピックで若者たちが出会」い、「互いに関わり合いながら生きていることを認識する」必要があると考えた。そして、あらゆる国の若者が互いに理解し合い、譲り合うことによって築き上げられる世界平和の実現をオリンピックにおける理想として掲げたのである。つまり、スポーツを媒介としながら世界中の若者が他者や他国の文化と出会い、自分の枠の外に広がる多様な世界の存在に目を向けていくこと、そしてスポーツを通して相互理解と相互尊重の精神を学び取り、世界平和を見据えた共存、共栄の礎となっていくこと、以上が世界平和を見据えたクーベルタンのオリムピズムにおける

国際親善の意味内容であったといえるだろう。

3. オリムピズムとオリムピック休戦

戦争の要因となる他者や他国への無知を克服する場としてオリムピックを位置づけたクーベルタンは、オリムピック競技大会では観衆の「一方的な国民感情」は「休戦状態」にしなければならないと述べている。この点に関する説明は、1935年の「近代オリムピズムの哲学的基礎」^{注8)}と題するラジオ演説の一節にみられる。

達成された偉業の高さに比例して大歓声が一斉にわき起こるべきです。オリムピック競技会ではもっと起こって然るべきです。しかも国民的好みなど度外視して起こるべきです。一方的な国民的感情などは一切、その時休戦状態、いうなれば「一時休暇状態」となるべきです。「休戦」の観念。これもまたオリムピズムの構成要素の一つです。この観念は「リズム」の観念と密接に結びついております。オリムピック競技会の開催は天文学的に厳密なリズムをもって行われなければなりません。何故なら、オリムピック競技会は人類の各世代の陸続たる台頭を讃えんために4年毎に訪れる人類の春の祭典を意味するからであります。それ故にこそ、このリズムは厳密に守られなければならないのです。現代でもかつての古代と同じように、たとえ一つのオリムピアードが何か絶対的な予期せぬ事態によって祝福されないことがあっても、その順序も数も変えることはできないのです。…人類の春とは「若い成人」すなわち機械にたとえれば、すべての歯車の装備が完了し調子よく作動する準備が整った最高の機械のようなものを意味します。これこそオリムピック競技会がその名誉を讃えるために開催され、そのリズムを組織し維持すべき対象者です。何故なら、近い将来ならびに、過去と未来を調和的に結合する鎖は若

い成人の肩にかかっているからです。…この若い成人の名誉を讃える方法として、この趣旨において彼の周囲に定期的な間隔において騒動、論争、誤解の一時的停止を提唱すること以外によい方法が他にあるでしょうか。…若い成人は本当に力強い人間です。その意志は非常に強く、利益とか支配欲とか所有欲などの充足を、それが如何に正当なものであるにせよ、停止させることを自らに課し、集団に要求することができます。私としては戦争の真っ最中に、誠実で礼儀正しい筋肉的競技会を開催するために相手の軍隊が暫くの間闘いを中止すれば大いに評価するでしょう。(クーベルタン, 1935: 清水, online)

クーベルタンは、オリンピックでは「達成された偉業の高さに比例して大歓声が一斉にわき起こるべき」であり、それは「一方的な国民感情」が「休戦状態」にあるなかで行われるべきだとした。また、「若い成人の名誉を讃える方法」として、4年に一度の「リズム」に沿った「騒動、論争、誤解の一時的停止」を提唱し、「戦争の真っ最中に、誠実で礼儀正しい筋肉的競技会を開催するために相手の軍隊が暫くの間闘いを中止すれば大いに評価する」とも述べている。

では、ここでいう「一方的な国民感情」とはどのような感情であろうか。それは、盲目的な自国への愛国心から生み出される他者や他国に対する敵対感情や攻撃的感情のことではないかと考えられる。(黒須, 2015) こうした感情は平和な世界の礎となるよう促される国際親善といった営みとは相反するものである。故に、若い競技者たちの無知の克服の場であるオリンピックにおいては、そのオリンピックを支える観衆自身の態度として、「一方的な国民感情」「騒動、論争、誤解」、そして「戦争」は休戦状態となるべきであるとクーベルタンは説いたのではないだろうか。このオリンピック休戦という「観念」は、オリ

ンピックの理念が競技場のなかだけでなく、オリンピックを取り巻く国際社会全体へ広がっていくことを意図した平和運動としてのオリンピック・ムーブメントのすがたを明確に示すものだといえる。だからこそ、クーベルタン自身が記すように、休戦の「観念」は世界平和を目的としたオリビズムの構成要素の一つに成り得るのである。

むすびにかえて

本報告では体育教師の教材理解に向けた試みとして、クーベルタンのオリビズムにおける国際親善及び世界平和の意味、そしてオリンピック休戦との関わりについて解説を行ってきた。さいごにスポーツの国際親善や世界平和への役割に関する学習と、本報告で解説を試みた知識を「体育の知識の総合体」のなかに位置づけたい。

佐藤 (2011) は「学習指導要領に込められた体育の知識の総合体」を、「体の動かし方や運動の行い方に関する知識」、「体力や健康・安全に関する知識」、「運動実践につながる態度に関する知識」、「生涯スポーツの設計に関する知識」の4つに分類し、これらが領域の特性に応じて、運動に関する領域と体育理論に整理されていると述べている。この分類に従うならば、文化としてのスポーツに関する知識は、「生涯スポーツの設計に関する知識」に該当し、スポーツの国際親善や世界平和への役割についての学習は、生涯スポーツの実践者、理解者としてスポーツに関わる者に求められるスポーツそのものへの「見方」、「考え方」に関する学びとして位置づけられるだろう。このスポーツの実践者または理解者としての関わりは、スポーツの「する」「みる」「支える」「知る」(中央教育審議会, 2016) といった形でのスポーツ参加や参画に置き換えることが可能である。本稿でみてきたクーベルタンのオリビズムは、スポーツには国際親善を通して世界平和に寄与できる可能性があるという「考え方」を教えてくれる。この

「考え方」には、なぜスポーツは国際親善や世界平和において重要な役割を持ち得るのか、そのためにスポーツを「する」競技者だけでなく、スポーツを「みる」「支える」「知る」立場にある観衆にはどのような態度が求められるのかといった点も含まれている。こうした教材内容に関する理解があつてはじめて体育教師はオリンピック・ムーブメントにおける活動や、オリンピックの理想を体現するような実際のエピソード、さらにその理念とは相反する事例を題材として取り上げながら、生徒の学びとなる授業を展開することが可能となる。今後は、実際に保健体育の現職教員や教員志望学生のオリンピズムに関する知識の有無や理解の程度を調査しながら、本報告で解説を試みた内容を教材研究にどのように活かしていけるのか検討していきたい。

注

注1) 吉中・海野(2009)の中学校の体育理論における授業実践報告や、宮崎(2012, 2017)の高等学校の体育理論における実践研究、オリンピックとオリンピックムーブメントに関する学習内容とその系統性を示した田端・榊原(2013)の研究などが挙げられる。

注2) オリンピックの理念を意味するオリンピズムという用語は、1894年にクーベルタンによって生み出された造語である。しかしクーベルタンが「近代オリンピズムの哲学的基礎」を発表する1935年までの約40年の間、彼はこの用語に明確な定義をほとんど与えなかったという。つまり、「現在、私たちが手にできるオリンピズムへの手がかりのほとんどが、この用語の創造者以外の者が用いたフィルターを通して生成されたものである。言葉を創った本人が40年後になっておおまかな定義をした思想、その本人の手を離れて他人による解釈が必要とされ今日に至っている思想。このような歴史的な構造を持ち合わせている思想が「オリンピズム」なのである。(和田, 2010, 2014) この点について田原(1993, 2008)は、「クーベルタンがオリンピズムを敢えて定義しなかったのは、人々がいつの時代にあつても、

その時代のオリンピズムを問い続けていくことを求めたからだといわれている。したがって、オリンピック競技大会のあり方も、時代とともに変わりゆく。いつの時代も変わらないオリンピズムの普遍的な価値は、オリンピックが、どのような形であれ、人間の成長に重要な貢献をするという教育的な価値である」と述べている。本稿で、オリンピック競技大会はクーベルタンが唱えたオリンピズムを「基盤」として展開されるオリンピック・ムーブメントの一活動である、と表現したのは以上の「歴史的な構造」を持つオリンピズムの特徴に留意したためである。

注3) 本報告では、スポーツによる国際親善や世界平和というテーマを取り上げるにあたり、クーベルタンのオリンピズムに関わる解釈は和田(2014, 2015)の研究に依拠し、無知の克服を根幹に置いた教育学的理念に基づく平和思想として捉えている。なお、以下の引用にあるように、和田(2015)はIOC会長を辞任した直後にクーベルタンが創設した万国教育連盟に注目し、連盟における教育改革のなかで示された「知の飛翔」こそ、クーベルタンがオリンピック・ムーブメントのなかで真に意図していたものであったと指摘している。「ピッケル片手に専門的な学問領域の山を登り始めると周りが見えなくなり、周りが見えなくなるとこれが戦争の種になってしまうと考えたクーベルタンは、ここに強い危機感を抱きました。そして、それぞれが自分の殻に閉じこもったままだと、いくらたつても平和な世の中は来ない、世の中を平和にするには自分の枠の外を知ろうとしない無知の状態をなくしていかなければならない。それを取り払う有効な方法が『知の飛翔』であると考えたのです」。

注4) IOCは、1992年の第99回IOC総会で「オリンピック休戦」を支持するIOCのアピール」を決議して以降、国際社会に向けて積極的にオリンピック休戦の呼びかけを行っている。オリンピック休戦に関する活動はIOCの1つのプロジェクトとして位置づけられており、2000年にはアテネに国際オリンピック休戦センターを設立、1993年以降は夏季・冬季大会の前年の国連総会でオリンピック休戦のアピール

ルが繰り返し決議採択されている。2018年に韓国の平昌で開催された第23回オリンピック冬季競技大会においても、前年の2017年に国連総会でオリンピック休戦決議が全会一致で採択されている。なお、1992年時のIOC総会におけるオリンピック休戦アピール決議の背景については、黒須（2013）を参照されたい。

注5) 改訂後の体育理論の実施状況及び実施内容について検討した村瀬・流川・三世（2017）は、中学校保健体育科教員を対象とした調査のなかで「体育理論を行うにあたって困ったこと」に、「時間が取りづらい」に次いで「内容が扱づらい」「教材が手元に無い」といった回答が多く挙げられている結果を示している。また、子供が自分の「する」スポーツとはかけ離れた内容に見えるため、教員が教材研究を十分に行っていない場合、子供たちの興味は喚起されにくいと指摘している。

注6) 夏季オリンピックの公式名はGames of the Olympiadと表記され、近代オリンピックの場合、第1回大会が開催された1896年をオリンピックアードの起点としている。例えば、戦争の影響で開催を返上した1940年の東京大会もGames of the XII Olympiadとして数えられている。よって頭のローマ数字はオリンピックアードを表しているため、戦争によって開催されなかった1916年第6回大会（ベルリン）、1940年第12回大会（東京）、1944年第13回大会（ロンドン）も正式にカウントされており、実際に開催された大会の通算回数とは異なっている。（日本オリンピックアカデミー、2008）

注7) クーベルタンは幼少期に普仏戦争とパリ・コミュニケーション下の戦いを経験した。彼の平和を希求する確固たる信念は、そのとき目の当たりにした殺戮が地球上で二度と起こってほしくないという願いから来たものだといわれている。（和田、2014）

注8) 「近代オリビズムの哲学的基礎」は、「ベルリン大会を準備する市民に向けて1935年8月4日に放送されたクーベルタンからのラジオ・メッセージで、標題の通り、近代オリビズムの創始者がオリビズムの哲学的な基礎について直接語ったものである」。（和田、2010）このラジオ演説の翻訳には、ピエールド

クベルタン著、C. ディーム編、大島鎌吉訳（1962）「近代オリビズムの哲学的原理」『オリンピックの回想』ベースボール・マガジン社、pp. 201-207があるが、本報告では、フランス体育史、クーベルタン研究者である清水重勇氏のウェブサイト公開されている、クーベルタン原典翻訳ブック「近代オリビズムの哲学的基礎」を引用した。

引用・参考文献

- 中央教育審議会（2016）幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）平成28年12月21日、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（参照日：2018年1月7日）
- 黒須朱莉（2013）IOCによるオリンピック休戦アピールの決議決定：1992年第99回IOC総会議事録と国内外の新聞資料を手がかりに、スポーツ史研究、26：17-31。
- 黒須朱莉（2015）近代オリンピックの理想と現実：ナショナリズムのなかの愛国心と排他的愛国主義、石坂友司・小澤考人編、オリンピックが生み出す愛国心 スポーツ・ナショナリズムへの視点、かもがわ出版、86-115。
- 宮崎明世（2012）高等学校におけるオリンピック教育の実践研究：大学と附属学校の連携による授業実践から、筑波大学体育科学系紀要、35：91-101。
- 宮崎明世（2017）高等学校の体育理論におけるアンチ・ドーピング授業の検討：JADAアンチ・ドーピングテキストを活用して、筑波大学体育系紀要、40：43-55。
- 文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説 保健体育編、東山書房。
- 文部科学省（2009）高等学校学習指導要領解説 保健体育編、東山書房。
- 師尾晶子（2004）休戦を運ぶ使節たち—祭典の幕開け—、桜井万里子・橋場弦編、古代オリンピック、岩波書店、74-89。
- 村瀬浩二・流川鎌語・三世拓也（2017）体育理論の実施状況と実施内容に関する考察、和歌山大学教育学部紀要、67：1-5。

- 日本オリンピック・アカデミー編（2008）ポケット版 オリンピック事典，楽。
- ピエールドクベルタン著，C. ディーム編，大島鎌吉訳（1962）オリンピックの回想，ベースボール・マガジン社。
- 真田久（2012）オリンピックを体育理論の教材にするヒント，体育科教育，60（7）：18-21。
- 佐藤豊（2011）体育理論のポイントを考える，佐藤豊・友添秀則編，楽しい体育理論の授業をつくろう，大修館書店，13-22。
- 清水重勇，クーベルタン原典翻訳ブック「近代オリンピズムの哲学的基礎」http://www.shgshzmz.gn.to/shgmax/public_html/coubertin/philosophie_olymp_jp.html（参照日：2018年2月4日）
- スワドリング，ジュディス著，穂積八洲雄訳（1994）古代オリンピック，日本放送出版協会。
- 田端真弓・榎原浩晃（2013）中学校・高等学校保健体育「体育理論」領域のオリンピック教材作成の試み：オリンピック競技大会及びオリンピック・ムーブメントの学習内容とその系統性，福岡教育大学紀要 第五分冊，芸術・保健体育・家政科編，62：91-101。
- 田原淳子（1993）オリンピズムに関するIOAの見解，体育史専門分科会シンポジウム報告「日本におけるオリンピック運動の歴史（2）」日本体育学会体育史専門分科会編，体育史研究，10：69-72。
- 田原淳子（2008）オリンピックと教育：オリンピック競技大会誕生の背景とその今日的意義，体育・スポーツ科学研究，8：7-12。
- 和田浩一（2007）＜翻訳＞ピエール・ド・クーベルタン「一八九六年のオリンピック競技会」，研究紀要 人文科学・自然科学篇，48：89-108。
- 和田浩一（2010）オリンピズムという思想：新しいオリンピズムの構想への序章，現代スポーツ評論，創文企画，23：62-71。
- 和田浩一（2014）嘉納治五郎から見たピエール・ド・クーベルタンのオリンピズム，金香男編，アジアの相互理解のために，創土社，167-189。
- 和田浩一（2015）オリンピックの創出とクーベルタンのオリンピズム：オリンピック・ムーブメントの内実と同時代的評価・誤解について，井上洋一，和田浩一，小石原美保，石坂友司，黒須朱莉，第2回 奈良女子大学 オリンピック・公開シンポジウム採録「オリンピックの創出とクーベルタンのオリンピズムを問う」，奈良女子大学スポーツ科学研究年報，17：50-54。
- 吉田文久（2016）学校体育における「体育理論」の新たな位置づけとその授業づくり（その1）：「文化としてのスポーツ」の学びを位置づける授業の構想に向けて一，日本福祉大学子ども発達学論，8：1-14。
- 吉中孝志・海野勇三（2009）実践記録：中学校体育科におけるオリンピック教育の試み，教育実践総合センター研究紀要，27：59-70。